

天然痘の恐ろしさ与人々の祈り

天然痘は、古くから人々に恐れられてきた病気です。天然痘ウイルスは、空気伝染により体内に侵入し、血液から全身に広がります。顔や手足などに発疹が現れ、水疱から膿疱に進展し、高熱を發します。乳児死亡率が高く、運よく生き延びても痘痕が残り

天然痘の原因について、江戸時代の初め頃までは明らかではありませんでした。そのため、人々は天然痘除けの神を信仰し、魔除けをする風習もありました。

天然痘を治療しようとする試みも行われていました。特に幕府が重用した池田流の治療法は、江戸時代を通じて天然痘対策をリードしました。



痘疹の児の図

中富記念くすり博物館



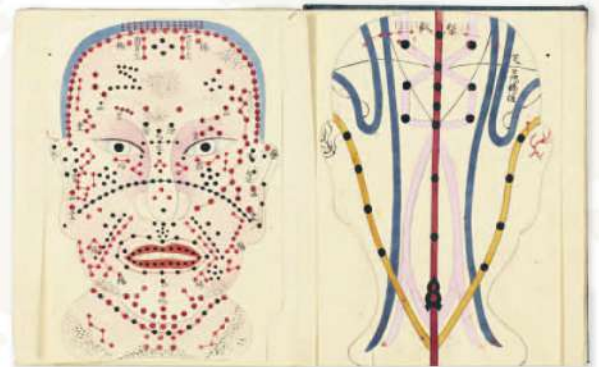
疱瘡心得草

志水軒朱蘭作 | 寛政10(1798)年 | 武雄市

池田流治痘術

池田流治痘術は、唇や舌の診療を通じて天然痘の進行具合を確認する手法です。中国から渡来した医師戴曼公から、岩国の池田正直に伝えられました。池田家は4代目の池田錦橋のときに、幕府に取り立てられています。

一方、中国で考案された予防法「人痘法」には、池田家は否定的な立場でした。後に種痘の導入に関わった人々は、池田流治痘術を学んでおり、従来の人痘法との差異や、より安全な牛痘法を目指しました。



池田流痘瘡唇舌鑑図

天保11(1840)年 | 中津市 | 中津市重要文化財



痘家治術伝

戴曼公著・池田正直校正 | 中村涼庵関係蔵書 | 武雄市

天然痘の恐ろしさ与人々の祈り / 池田流治痘術

人痘法と緒方春朔の登場



緒方春朔肖像画写真
個人

天然痘は、恐ろしい病気でしたが、一度罹って完治すると、二度と罹らないことも知られていました。そのため、人為的に軽い天然痘に罹らせる「種痘」が行われました。予防接種のはじまりです。天然痘患者の膿や痂を健康な人に接種する方法を「人痘法」と言います。しかし、人痘法は副作用で患者が死亡することもありました。

秋月藩医の緒方春朔は、中国から伝わった人痘法を独自に改良し、寛政2(1790)年に初めて成功させました。春朔は、人痘法の普及にも尽力しており、「種痘必順辨」をはじめとする計3冊の種痘書を記した他、全国の医師への種痘法の伝授にも力を入れました。



種痘必順辨
緒方春朔著 | 寛政7(1795)年 | 個人

人痘法と緒方春朔の登場 / 緒方春朔の人痘法

緒方春朔の人痘法



◆人痘法イメージイラスト
【参考】緒方春朔種痘成功200年記念のレリーフ
甘木歴史博物館

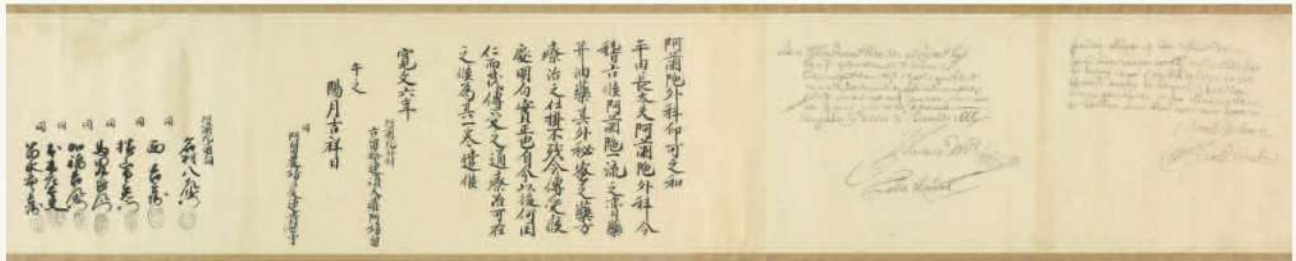
緒方春朔の人痘法は、中国から伝わった方法の内、「早苗種法」を改良したものです。早苗種法とは、天然痘患者の痂を粉末状にし、銀管あるいは竹筒で鼻の中に吹き込む方法です。春朔は、痂の粉末を吹き入れるのではなく、曲管や柳製のへらなどに盛り、鼻孔に近づけ睡眠中の呼吸で吸い込ませる方法を採用しました。このことにより、吹き入れたときに咳き込んで失敗する危険もなくなり、百発百中成功させたといわれています。

中津蘭学事始

中津蘭学の歴史は古く、享保2(1717)年に作成された平田長太夫あて「阿蘭陀流外科免状(修業証書)」が残されています。これは、長太夫に学んだ中津藩医辛島家初代の辛島正庵に伝来した写しです。

中津蘭学で忘れてはならないのが、前野良沢です。「解体新書」の訳者の一人として有名な良沢は、中津

藩3代藩主奥平昌鹿の支援を受け、生涯を蘭学研究に捧げ、医学をはじめとする蘭書の翻訳を多く手がけました。また、5代藩主奥平昌高は、「蘭語訳撰」「バスタールド辞書」という先駆的な蘭和・和蘭辞書を発行させました。他にも、文政2(1819)年に九州で初めて人体解剖をおこなった村上玄水や、明治4(1871)年に開設された中津医学校の初代校長となった大江雲沢など、多くの蘭方医が活躍しました。



平田長太夫あて「阿蘭陀流外科免状(修業証書)」

享保2(1717)年 | 中津市



前野良沢肖像

個人



蘭語訳撰

文化7(1810)年 | 中津市

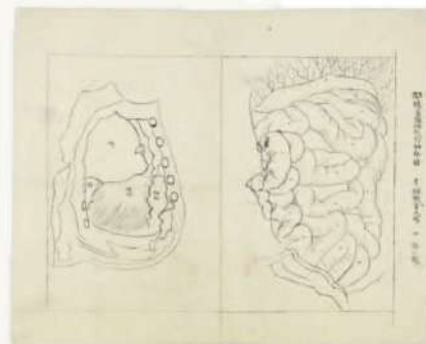
バスタールド辞書

文化7(1810)年 | 個人 | 中津市寄託



解臍記

村上玄水 | 個人 | 中津市寄託



解剖図

村上玄水 | 個人 | 中津市寄託



雲澤先生痢疾口授

個人 | 中津市寄託

中津蘭学事始

牛痘伝来

1798年、イギリスのジェンナーが「牛痘種痘法」を発表しました。牛が罹る天然痘は人間に感染しても重症化しないことにヒントを得た牛痘法は、より安全な方法として、急速に世界に広まっていきました。

日本でも、オランダ商館長のbronhofなどが、ワクチンである牛痘苗の輸入を試みました。オランダ商館医のシーボルトも、牛痘苗の輸入と接種を試みましたが、いずれも失敗に終わりました。シーボルトに学んだ安芸の医師・日高涼台は、オランダ語で書かれた種痘についての書物を翻訳しており、地方の医師たちも種

痘に関心を持っていたことがわかります。

佐賀藩では、伊東玄朴が藩主の鍋島直正に牛痘法の導入を進言し、弘化4(1847)年には、牧春堂が『引痘新法全書』を刊行しました。直正は、長崎在住の佐賀藩医・檜林宗建に牛痘苗の輸入をひそかに依頼しました。宗建は、人痘法では痂を使用していることに注目し、オランダ商館医モーニックに牛痘痂の持参を提案しました。そして嘉永2(1849)年、牛痘痂を使って接種を行い、日本で初めて牛痘法を成功させました。同年には、直正の子の淳一郎(後の佐賀藩主鍋島直大)も牛痘種痘を接種しています。

日本における牛痘法は、導入を試みた人々の努力と、人痘法の経験によって成功したのです。

牛痘伝来



シーボルト像

武雄市

シーボルト 失物児杜経験方

武雄鍋島家資料 | 武雄市

国重要文化財



日高涼台翁夫妻肖像

シーボルト記念館



直正公嗣子

淳一郎君種痘之図

陣内松齡 | 昭和2(1927)年

佐賀県医療センター好生館所蔵

佐賀県立佐賀城本丸歴史館寄託



引痘新法全書

邱浩川著・牧春堂校訂

武雄市

鍋島茂義と西洋の科学技術の導入

江戸時代の武雄^{ゆう}邑(領)は、佐賀藩から大幅な自治権を認められた武雄鍋島家によって治められていました。

武雄邑主鍋島茂義(1800-1862)は、旺盛な好奇心と対外的危機意識の高さから、西洋の進んだ科学技術に強い関心を持っていました。佐賀藩が福岡藩と隔年で担当した長崎警備の主任となり、オランダを通じてもたらされる西洋の進んだ科学力に深い感銘を受けたことから、蘭学導入を決意したといわれています。

茂義は、西洋式の砲術から始まり、軍学、測量術、化

学、物理学、医学、植物学など、幅広い分野にわたって当時の先進的な西洋の科学技術を導入しました。長崎を通じてオランダから様々な文物を入手しており、「長崎方控」にはその購入記録が詳細に記述されています。

茂義とその息子茂昌^{しげはる}の代の記録や、入手した品物の数々は、「武雄鍋島家洋学関係資料」として、国の重要文化財に指定されています。



鍋島茂義肖像
武雄市



長崎方控
武雄鍋島家資料 | 武雄市 | 国重要文化財

鍋島茂義と西洋の科学技術の導入



ランビキ・乳鉢・乳棒
武雄鍋島家資料 | 武雄市
国重要文化財



染付山水図蘭引
武雄鍋島家資料 | 武雄市
国重要文化財



顕微鏡
武雄鍋島家資料 | 武雄市
国重要文化財

武雄領の種痘

武雄でも、早くから種痘^{しゅとう}については注目されていました。武雄鍋島家の資料の中には、種痘について記されているオランダ語の書物や、嘉永2(1849)年の牛痘法の成功後、その普及のために書かれた書物が残されています。名村貞五郎宛文書には、武雄領の医師・中村涼庵^{りょうあん}が長崎に種痘の修業に出かけたことが記されています。「長崎方控」によると、嘉永2年9月に涼庵が種痘の接種を受けた子供たちを武雄に連れ帰っており、普及に関わったことがわかります。ところで、石井良一著『武雄史』には、佐賀藩よりも

早く涼庵によって牛痘が接種されたと紹介されています。また、「浄天公 附近古武雄史談」では、編者の牟田忠行の父平吉誠舒が種痘をしたときの様子が記述されており、「牛ノ痲瘡ダカラ、夫ヲ植ユレバ角ガ生エルトカ、牛ノ様ニ『モウ』ト啼ク等ト言ヒ触ラシタ者ガアツテ、誰デモ痲瘡ヲ植ユルトコヲ大變嫌フタ」という祖母の回想と、接種した父親の1歳という年齢から、天保8(1837)年に牛痘が行われたとされています。しかし、牛痘苗の入手方法が不明なこと、「浄天公 附近古武雄史談」が昭和に編纂されたもので、他に当時の資料がないことから、天保年間に武雄領で行われたのは人痘法で、その後牛痘法も行われたと推測されます。



種痘新論

武雄鍋島家資料 | 武雄市 | 国重要文化財

牛痘發蒙

桑田立齋 | 武雄鍋島家資料 | 武雄市 | 国重要文化財



名村貞五郎宛文書

個人

浄天公 附近古武雄史談

武雄鍋島家資料 | 武雄市

武雄領の種痘

牛痘法の広がり

「種痘法則」には、当時の牛痘種痘の様子を図示されています。人痘法と異なり、腕を小刀で傷つけたのち、針で痘苗を植え付ける手法でした。

牛痘法成功の知らせは、全国に広まり、種痘を行う種痘所(除痘館)が各地に設けられました。牛痘法普及のための著作物も多く出されました。

佐賀藩では、種痘実施のための引痘方が設置されました。引痘方では、全額藩の費用で、藩内への医師の派遣と種痘が実施されました。各地の村医者や協力して種痘接種所をまわり、江戸時代中にはほぼ全領

域で種痘が行われたといえます。佐賀藩引痘方での種痘事業は、現代の予防医学や地域医療システムの先進的な取り組みとして、高く評価されています。



種痘法則
武雄市



牛痘小考
榎林宗建 | 長崎歴史文化博物館



種痘器具
武雄市



種痘廣告
桑田立齋 | 佐賀県立博物館



引痘方諸控
松尾徳明 | 佐賀県立博物館

牛痘法の広がり

コレラの流行と対策

安政5(1858)～6(1859)年にかけて、全国的にコレラが大流行しました。コレラは、コレラ菌に感染することで下痢による脱水症状になります。体力が急速に消耗し、重症の場合には死に至ります。健康な人でもひとたびコレラに罹れば、「コロリ」と斃れて急死するので、「トンコロリン」「三日コロリ」と恐れられました。

大坂で種痘所を開設した緒方洪庵は、コレラの治療や予防に関する著作も刊行しました。武雄の中村家には、緒方洪庵が執筆の参考にしたドイツの医学書の訳書が残されています。中津では、コレラ流行の際の心構えとして、「換気」や「消毒」など、現代にも通じる対策が書かれた高札が立てられました。



家塾虎狼痢治則

緒方洪庵 | 個人

侃斯達篤内科書 卷二十三

坪井信良訳 | 中村涼庵関係蔵書 | 武雄市

安政六年 惣町大帳

中津市 | 大分県指定有形文化財

主な参考文献

- 青木歳幸・大島明秀・ヴォルフガング＝ミヒエル編「天然痘との闘い【九州の種痘】」(岩田書院、2018)
- 朝倉市秋月博物館図録「緒方春朔」(朝倉市教育委員会、2020)
- ヴォルフガング＝ミヒエル・鳥井裕美子・川島真人編「九州の蘭学—越境と交流—」(思文閣出版、2009)
- 佐賀大学・小城市交流事業特別展図録「いのちを守る—疫病と小城—」(佐賀大学地域学歴史文化研究センター、2021)
- 富田英壽「天然痘予防に挑んだ秋月藩医 緒方春朔」(海鳥社、2010)
- 中津市歴史博物館図録「伝染病との戦い—先駆者は九州にいた—」(中津市歴史博物館、2021)
- 武雄市図書館・歴史資料館図録「蘭学の来た道」「九州の蘭学・武雄の蘭学」「日本を動かす!」「蘭学の競演」

協力者一覧(敬称略、五十音順)

青木歳幸	朝日恵子	阿部大地	安東慶子	池田三紗	ヴォルフガング＝ミヒエル	大江満	織田毅
川島真人	志佐喜栄	七田忠昭	篠原浩之	清水猪兔子	清水和彦	杉東明	曾我俊裕
田長丸真弓	立昌敦子	田中友子	寺田憲司	富田紘次	富田英壽	中村早知恵	中富貴代
福田正	前田ゆい	三谷紘平	村上玄兒	矢田純子	山口佐和子	吉田忠	芳野貴典

協力機関一覧

朝倉市秋月博物館 大阪大学適塾記念センター 公益財団法人中富記念財団中富記念くすり博物館 公益財団法人鍋島報効会
佐賀県立佐賀城本丸歴史館 佐賀県立博物館・美術館 シーボルト記念館 多久市郷土資料館 独立行政法人佐賀県医療センター好生館
長崎歴史文化博物館 中津市歴史博物館 普門山圓應寺



EPOCHAL TAKEO
イボカル武雄

武雄市図書館・歴史資料館

〒843-0022 佐賀県武雄市武雄町大字武雄5304-1
TEL.0954-28-9105 FAX.0954-28-9205
E-mail: epochal@city.takeo.lg.jp

<http://www.city.takeo.lg.jp/rekisi/his-top.html>



令和4年1月